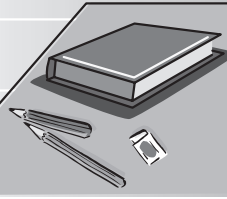


学生時代と図書館 90

「べ、べつに図書館が好きってわけじゃないんだからねっ！」

(ツンデレ)

野澤 元



この原稿の依頼が来たとき、正直お断りしようかと思いました。私は図書館はおろか本にも愛着がない人間なんです。館長先生にそうお話ししたところ、「そこは野澤さんの感性で」と…。

本や図書館について書いたら適任なのはむしろ私の妻。彼女は中学高校と図書委員で、司書と学校図書館司書の資格を持ち、学生時代は市立図書館でバイト、卒業後は2つの大学図書館で働いてた、本と図書館が大好きな人なのです。なので、僕が「場所を取らないから、電子ブック買った」とか言うと、夫婦喧嘩の原因になります。一枚ずつページを指でめくる、それが彼女にとっての本なのです。

学部生の時代から、僕にとって図書館は特に好きな場所ではなかったです。それは今とは違い、文学を専攻していたからかもしれません。僕は当時、英米文学を学んでいたんですが、そのうちに文学研究に不信感を抱くようになりました。なぜなら、文学作品には読者の数だけ自由な解釈があるわけで、それらをいちいち取り上げてその優劣を論じて、意味がないと思ったからです。で、図書館に行くと文学作品を解釈して論じる本がぎっしり詰まっている。僕から見れば、「個人的な感想文をこんなに集めてどうするんだろう」と。作品全集とかを「コーパス(corpus)」って言いますが、あれは死体って意味もあるんです。図書館には解釈の屍がドンドン蓄積されていて、「ここはまるで墓場だな」と。

大学院生になって専門を言語学に変えました。もっと専門的な論文を読むようになり、大学図書館の巨大な地下書庫にはよく古い雑誌を探しに行きました。それと同時に、その頃には多くの雑誌がオンライン化されて、ネット上でPDFになった論文を検索することも増えました。そういう時代の変化の中で、「図書館や大学の役割の半分は終りつつあるな」と思うようになりま

した。

当時、読書の社会史なんかが流行って、僕も少しは読みました。本は時代や社会階層によって違った使われ方をしていて、技術と市場が発展すると、知識を流通させる媒体として、人々の啓蒙にとっても重要な役割を担うようになります。でも、やっぱり本は「物」としての限界を超えられないところもある。つまり、本を持っているヤツが勝ちなのです。今でも本って権威の象徴に見えませんか。持ってるだけで賢そうに見えるし、研究室の机にやたらと本を高く積む教授とか、好きじゃなかったです。

まあ、図書館はそんな本を集めて、誰でも読めるようにしている素晴らしいところなんです。本が「物」としての限界を超えたら、ある意味不要な場所でしょう。ネット上で誰もがどこでも知識を手に入れられる、知識が偏在する時代になったら、「知識の集積」という役割は不要になってしまう。つまり、図書館や大学は存在意義の半分を失うわけです。

でも、残りの半分の役割、「知識の活用」という仕事は、これからも図書館や大学に残るでしょう。知識は図書館の外にあり、図書館はその知識を活用する方法を教え、また実際に活用する場所になる。僕の学部生時代、大学院生時代、そして今は教員ですが、それぞれの時代で図書館も大学もドンドン変わっていきます。

本の質感を愛し、図書館の雰囲気を楽しむ人々はたくさんいます。消滅はしないとしても、そういうものが少しずつ姿を消してゆけば、彼らは寂しがるでしょう。もちろん、その気持ちはわからなくもないです(そういう人と結婚したぐらいなので)。同時に、僕は新しい役割を担う未来の図書館も見たい気がするのです。

のざわ はじめ (講師・認知言語学)